

光陰似箭

巫宝三研究員の逝去を悼む

(東京大学社会科学研究所)

田島 俊雄

1999年2月1日、中華民国期の国民所得推計で著名な巫宝三中国社会科学院経済研究所研究員が北京で逝去された。享年94歳であった。

巫宝三先生は1905年に江蘇省句容県で生まれ、1927年に南京の中央大学に入学、のちに清華大学に転じ、32年に同校を卒業した。南開大学経済学院を経て33年には北平社会調査所に助理研究員として入所、34年に同所が中央研究院社会科学研究所と合併して以降、1949年まで一貫して同社会科学研究所において研究に従事した。この間、1936年から38年にかけて、ハーヴァード大学に留学、修士号を取得し、さらに38年から39年の間、ベルリン大学で学んだ。1947年に再度アメリカに渡り、48年には中国の資本形成と消費支出をテーマとする論文で、ハーヴァード大学より博士号が与えられている。

人民共和国成立以後、巫宝三先生は中央研究院社会科学研究所の後身である中国科学院社会科学研究所、同経済研究所にて引き続き研究に従事し、経済研究所副所長、代理所長、経済思想史研究室主任、『経済研究』編輯委員会委員、1979年以降は中国社会科学院経済研究所學術委員会委員、同顧問、中国社会科学院研究生院教授などを歴任した。また所外の職務としては、中国経済思想史学会会長、中華外国経済学説研究会顧問、中国民主促進会中央常務委員、全国政協第5、6、7期委員、北京市政協第6期副主席などを務めた。

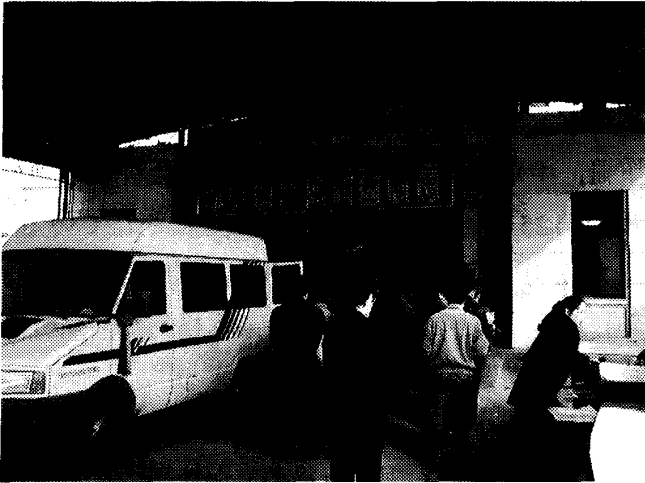
巫宝三先生の研究業績は、共和国期に主として従事した経済思想史の研究もさることながら、冒頭に述べたように、40年代に行った民国期を対象とする国民所得推計が国際的に知られる。この研究は、陶孟和社会科学研究所長、方顯廷南開大学

教授らの支持の下、1942年に汪敬虞、章有義、馬黎元、南鐘万、貝有林らと始めたもので、その成果は巫宝三主編者『中国国民所得（1933年）』上下冊、中華書局（国立中央研究院社会科学研究所叢刊第25種、1947年）として発表されている。土方成美『国民所得の構成』（日本評論社、1933年）につづく、アジアにおける本格的な国民所得推計といえよう。

巫宝三先生らによる推計は、当時の資料的な制約から推計範囲も国民所得の三面等価のうち生産所得、および支出所得のうちの消費支出にとどまるが、近代経済史にかかわる統計資料の整備は嚴中平らによって継続され、また国民所得の推計作業自体も、A.エクスタイン、T.C.リュウ・K.C.イエらによって、人民共和国期につなげる形で引き継がれた。

このように民国期に大きな仕事をした巫宝三先生であるが、共和国期に入ると経済思想史の研究に転換することになる。一面では、恩師・シュンペーターの経済学体系のよって立つ「企業家精神」について、その中国におけるありようを研究したと解釈できるかも知れない。しかし1950年代における一連の政治運動や、硬直した当時の左翼的風潮によって迫られた転向であることも疑いない。反右派闘争前後の中国の経済学界、とりもなおさず経済研究所の状況については、当時の『経済研究』誌で垣間見ることが可能である。とりわけ国民所得推計で苦勞を共にした同志の離反は、巫先生にとって大きなショックであったと想像される。

さらに文革期に経済研究所が置かれた困難な状況については、顧準『顧準日記』（経済日報出版社、1997年）によってかなり詳細に知ることができる。すでに還暦を迎えられた巫宝三先生その他の中国を代表する経済学者達は、いつ果てるとも知れない政治運動に巻き込まれ、河南省の五七幹部学校において農作業や豚の世話に忙殺された。



入口に「況痛悼念巫宝三同志」の文字

筆者は1985年から86年にかけて中国社会科学院経済研究所に滞在し、巫宝三先生に直接お目にかかる機会があった。その際、改革開放の今こそ国民所得の推計作業を再開し、民国期と共和国期の統計の断絶を埋めるべきではないか、と非礼を省みず質問したことがある。先生は寛容な笑みを浮かべつつ、自分は高齢であり、若い人たちがやることだと答えたのが印象に残っている。また先生の方から「都留教授は元気か」と私に質問があったことを覚えている。都留重人一橋大学名誉教授、P.A.サミュエルソンMIT名誉教授といった経済学の大家は、巫先生にとっては大学で共に学んだ同学にほかならない。

巫宝三先生の葬儀は1999年2月10日に北京の八宝山革命公墓にて行われた。たまたま経済研究所に訪問学者として滞在していた筆者も参列した。



室内

荘厳な革命公墓での葬儀は、生前の先生の活躍にふさわしいものであったが、ご高齢であったためか、年輩の参加者が目立った。逆にいえば、経済研究所をはじめとする現役の経済学者の姿があまり見られず、一抹の寂しさを感じざるをえなかった。西側の経済学の影響が圧倒的な今日の中国においてこそ、すでに1930年代に欧米で近代的な経済学を学び、その導入・消化に悪戦苦闘された巫宝三先生の学識が活かされるべきであった。

中国における経済学の創始者の一人として、巫宝三の名は永く記憶されることになろう。

(巫先生の略歴については、葬儀の際に配布された「巫宝三先生生平」、ならびに「著名経済学家簡介 巫宝三」[『経済学動態』1987年第3期]を参照した)

*

*

*

*